平成19年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻

中間評価論文要旨

緒方 真奈美　カリキュラム開発における教師の暗黙知

北村 理佳　メルヒェンによる道徳教育の可能性
—『グリム童話集』の「赤ずきん」を手がかりとして—

大髙 皇　ドイツ地理教育にみる教授の構造化
—Engelhardの単元「ルール地帯の構造変化」を通して—

坪田 益美　カナダ・社会科におけるシティズンシップの育成原理
—アルバータ州を事例として—

藤井 大亮　オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の形成
—"Foxfire" 誌の分析を通して—

劉 晏君　日本統治時代の台湾の国語読本における
「説話」の機能に関する考察
—「国民的精神」の涵養を中心に—

大嶌 竜午　理科における実験活動の指導法に関する研究
—変数の制御を中心に—

中間評価論文要旨

カリキュラム開発における教師の暗黙知

緒　方　真奈美※

1．問題の設定

本研究の目的は，カリキュラム開発における教師の暗黙知に注目し，教師主体のカリキュラム開発の実際を明らかにするための枠組の提案を試みることである。

カリキュラム開発に関する我国の動向を振り返ると，1974年に開催された文部省・OECD-CERI共催の『カリキュラム開発に関する国際セミナー』が変革の基点となったということができる。何故ならこのセミナーではSBCD（School-based Curriculum Development）の理念が議論されるとともに，従来のカリキュラム開発のアプローチを，近代産業システムをモデルとする「工学的接近」と捉えその限界を指摘し，代替的なアプローチとして「羅生門的接近」が提案されたからである。「羅生門的接近」の提案によって，カリキュラムを使用する側（user）から自ら開発していく側（maker）へと教師の役割の転換が求められた点に本研究では特に注目する。

実際には，一部を除けば，学習指導要領の規定のもとでカリキュラムが編成されてきたため，教師はカリキュラムではなく授業の場での多様な教育方法の改善に主な関心があった。そのため，日本の各学校，各教師に「カリキュラム開発」という意識はあまり根付かなかった。ところが，カリキュラム開発主体としての教師の役割は，近年再び重要視され始めている。例えば，1998年度版学習指導要領から導入された「総合的な学習の時間」，あるいは「特色ある教育活動」を行うために，各学校によるカリキュラム開発が強く求められている。

そこで，近年では各学校が基本単位となるカリキュラム開発のために，様々な試みがなされている。特に学校経営の視点からPlan-Do-Seeに代表されるカリキュラムマネジメントが広がりを見せ，組織的・継続的にカリキュラム開発の定着を図る試みが進められている。だが，「学校に基礎を置くカリキュラム開発」が真に拡充していくためには，そのようなシステムの整備とともに，各教師の創造的

※カリキュラム

な実践によるカリキュラム開発にも注目し，その経験を充実させる必要がある。その理由は，カリキュラムの語義が，国家的基準としての「学習指導要領」から「学習経験の総体」まで幅広く捉えられて以来，カリキュラム開発の場が，実践の事前計画の段階から教室における授業過程も含めて存在すると考えられるようになったためである。このカリキュラム開発の場の重層性を考慮すると，実際に子どもと向き合う教師がカリキュラムを臨機応変につくりかえる授業過程も，カリキュラム開発の場として捉える必要があると考える。したがって，事前に計画されたカリキュラムを，修正しながらカリキュラムを実践する教師の役割は看過できない。その教師主体のカリキュラム開発にとって重要なのが，教師の実践的知識である。

実践的知識とは実践の場で働く知識の総称である。いわゆる判断力や直感なども含み，近年教師研究の領域で注目されている。何故ならば，複雑な学校現場での教師の試みには理論的な知識だけではなく，むしろ実践的知識が重要だと考えられるためである。本研究では，カリキュラム開発における教師の実践的知識としてポランニー（Polanyi, M）が提唱した「暗黙知」（Tacit Knowledge）を鍵概念として取り上げ，考察の対象とする。ここで，実践的知識のなかでも特に「暗黙知」に注目する理由は次の通りである。

「暗黙知」の性質は，複雑な教育事象を目の前にして本質だけを掴みとり授業に生かしていく実践的知識であり，それは創造的な活動に深く関わっている。教師によるカリキュラム開発の営みは，学校全体で設定されたカリキュラムを実践の場で創りあげていく創造的な営みである。特にその本質は，「デザイナー」のように自らの感性に基づき創造していく点にある。このように通常は直感や感性などと称され，数字や言語で言い表せない領域までも人間の有する知識として捉え，その可能性を唱えた学説がポランニーによる「暗黙知」である。すなわち，創造的営みであるカリキュラム開発には，それを支える知識である暗黙知の働きが大きい。

近年では，実践過程における教師主体のカリキュラム開発に注目が集まっているものの，その研究は緒についたばかりである。カリキュラム開発を，紙上ではなく，実際の教室で生起する事象を通して観察し，実証的に解明を試みる研究が80年代から広がりを見せており，教師の主体性や役割等が注目されている。しかし，多くの研究は，教師の専門性や思考様式などに焦点が当てられ，教師の実践

力の向上に資するための教師研究に比重が置かれ過ぎている傾向がある。個々の授業だけではなく，学校の全体教育計画や地域の文化的事情までも考慮に入れるカリキュラムデザイナーとしての教師に焦点を当てた研究は少ない。そこで本研究では，教師の実践力向上のための教師知識の探究ではなく，カリキュラム開発の重要な要素として教師の暗黙知に注目し，教師主体のカリキュラム開発の実際を明らかにするための枠組の提案を試みる。

2．論文の構成

序章　問題の設定
　第1節　問題意識
　第2節　教師の暗黙知に関する先行研究の検討
　第3節　本研究の目的と論文の構成
第1章　カリキュラム研究と教師に関する問題の転換
　第1節　Curriculum userとしての教師像
　第2節　羅生門的接近の出現
　第3節　カリキュラムデザイン概念と教師研究の展開
第2章　カリキュラム開発における教師の暗黙知
　第1節　ポランニーによる暗黙知論の整理
　第2節　カリキュラム開発における教師の暗黙知
　第3節　暗黙知と形式知の対比関係
第3章　カリキュラム開発事例による枠組の検証
　第1節　体験的な学習のカリキュラムにおける教師の暗黙知
　第2節　事例の検証
終章　結論
　第1節　研究成果
　第2節　展望と課題

3．論文の概要

〈課題1〉教師の「暗黙知」を研究する意義を明らかにするための前提として，カリキュラム開発と教師に関する研究の変遷を整理しこれまで何が問題とされてきたのかについて整理を行った。考察の軸として次の3つの軸を設定した。第1

の軸は50年代から60年代の行動主義を基底とするカリキュラム研究のパラダイムとその批判による教師の位置づけの転換である。第2の軸は，70年代のカリキュラム開発の新たなアプローチの提唱である。そして第3の軸は，近年我が国でも用いられることが多い「カリキュラムデザイン」の語義と70年代以降の教師研究の展開である。課題1は第1章に相当する。

〈課題2〉カリキュラム開発における教師の暗黙知の特質を明らかにすることを目的に，ポランニーによる暗黙知論を整理した。そのうえで先行研究を検討しながら教師の暗黙知の特質を明らかにした。最後に，カリキュラム開発における暗黙知を考察した。課題2は第2章第1節と第2節に相当する。

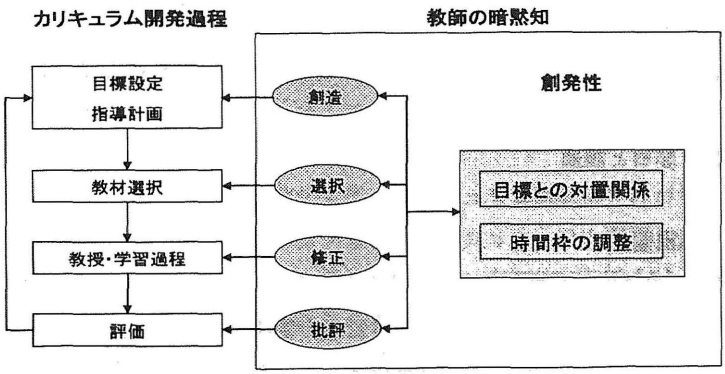
〈課題3〉実証的研究に向けて暗黙知の調査方法を検討した。そのために，そもそも暗黙知とはどのような場に見出され，捉えられるものなのかという課題を，暗黙知を見出し組織的な創造活動に役立てているSECIモデルを中心に検討した。課題3は第2章第3節に相当する。

〈課題4〉第2章で検討した枠組を更に検証するために，小学校で行われた国際理解教育の事例を通して教師の暗黙知の実態を考察した。

以上の検討を通して，教師の暗黙知によるカリキュラム開発の実際を明らかにするための理論的枠組の提示を行った。

4．結論と今後の研究課題

本研究の検討結果をモデル化し図式化すると以下のようになる。以下に示した図は「教師の暗黙知によるカリキュラム開発」である。



教師は，カリキュラム開発過程の各段階で暗黙知を背景に，矢印で示された4つの行為によってカリキュラムを創造する。第1に，カリキュラム開発の最初の段階である「目標・指導計画の立案」の際に，教師が単元の目標に具体的状況を加味して単元のねらいを「創造」することである。例えば，社会的問題など，児童生徒が実際に感受していることを単元の目標に出来るだけ加味することで，より現実味のある本時の「ねらい」を創りだすことである。第2に，授業の事前準備の段階である「教材選択」の際に，質の高い教材を「選択」することである。例えば，同じ教材を繰り返し用いるのではなく，目前の児童生徒の興味や趣向に合わせて教材を選ぶということである。第3が，計画されたカリキュラムが具現化される場である「教授・学習過程」で，単元の方向性や内容を「修正」することである。事前に用意したカリキュラムをそのまま実行するのではなく，必要があれば予定外の教材を用い，授業の方向性を変更する。単元の目標や時間枠に支障が出ないように微修正するという行為である。第4にカリキュラム開発過程全体を通したカリキュラムの「評価」の際に，児童生徒の態度や作文などからカリキュラム実践を「批評」することである。

以上のように，教師は自らの暗黙知を背景にカリキュラム開発過程で「創造」，「選択」，「修正」，及び「批評」を行う。とりわけ，「目標との対置関係」と「時間枠の調整」に照らし合わせるところに，カリキュラム開発における教師の暗黙知の特徴がある。「目標との対置関係」「時間枠の調整」とは全体の目標，定められた時間枠のなかでカリキュラム実践を微修正しながら進めることを意味する。本研究の事例から教師の暗黙知の質が，カリキュラムの質の高さを左右することが示唆されていた。それらは，いずれもカリキュラムを状況に応じて柔軟かつ動的につくりかえていく場面であり，暗黙知の視角からすれば，「創発性」を有しているといえる。

この「創発性」を鍵として，カリキュラム開発における教師の暗黙知の実際にアプローチするためには，次の点が実証的解明の手がかりとなる。それは，カリキュラム開発に関して教師らが用いる言葉，または他者へ自らの行為を説明する発話の中に含まれるメタファーやアナロジーである。例えば，教師集団に特有な言葉には，「ゆさぶり」などがあり，新任教師と熟練教師の言葉の使い方や意味づけが異なると考えられるため，そこに経験と直感に培われた暗黙知の一端が見出せると考えられる。さらに，その差異は教科学習と総合的な学習の時間，または

学校段階別でも異なった様相を見せると推測される。

これらの点を手がかりに，参与観察や「語り」の分析を通じて，暗黙知の作用を検証することが可能と考えられる。作用とはすなわち，「カリキュラム開発における教師の暗黙知は，教師が主体的なカリキュラム開発を行う際の実践的知識として働き，計画されたカリキュラムを，単元開発過程を通してより具体的状況に即した質の高いカリキュラムへと変容させる」という仮説である。この仮説を検証する研究に向けた今後の課題として次の点が挙げられる。第1に実証的研究の方法論の精緻化であり，第2に調査対象の選別である。

5．参考文献

文部省大臣官房調査統計課　1975『カリキュラム開発の課題』大蔵省印刷局

大串正樹　2003「知識創造としてのカリキュラム開発」『カリキュラム研究』第12号　43－56頁

Pine, N., 1992, "Three Personal Theories That Suggest Models for Teacher Research", *Teacher College Record,* Vol. 93, No. 4, pp. 656-672

Polanyi, M., 1966, The Tacit Dimension, Routledge & KeganPaul